

思います。

家族も今なお原爆にもめげずに、今日の命ある喜びを神々の御恵みと感謝しております。私もまた多くの方々に出会い支えられながら、温かく交わっていた。けたのは、ほかならぬ神様の愛と人との愛の賜だったのでないでしょうか。

ふる里満州から祖国日本へ

大分県 杉目 昇

私のふる里満州

大正五年七月、私は旧満州奉天市の日本領事館官舎で生まれ、大連で育った。大連第一中学校を経て、ハルビン学院に進み、蒙古民族興隆に希望を持って、ホルンバイル蒙古で満州国地方行政官として勤務した。この地方は、蒙系を主体に、満系・露系・鮮系など多民族の居住地域であった。

満州国が昭和七年建国され、我々日本人も満州国人

になり、日系と呼んだ。日鮮満蒙露など五族協和の国である。

日本の敗戦後、しきりに満州侵略との批判がなされているが、我々は「五族協和」「王道楽土」の旗高く掲げて、ひたすら満州国民三千万の幸せを願って、命懸けの日々をおくり、青春の情熱をこの地で燃やしたのである。満州こそ我がふる里であり、墳墓の地であると考えていた。

大東亜戦争の戦局が敗戦の色濃くなった昭和十九年二月、興安嶺西側浜州線沿線の街、牙克石^{ヤクシ}で応召、海拉爾^{ハイル}の部隊に入り、その年九月幹部候補生としての教育のため、熊本に派遣された。生を受けて二十八年を経て、初めて日本内地の空気と水をじっくり味わうこととなった。稲や竹とも初めての出会いであった。阿蘇の煙を望見しつつ、これが日本であることをしみじみと感じたのであった。

終戦、ふる里満州を目指して

昭和二十年八月に入って早々、軍情報は「ソ連はシベリア鉄道全幅の輸送力を挙げて満州国境へ兵員移動

中」との報告を流した。私は、三重県渡会郡田丸に駐屯していた新設部隊護京第四四連隊の小隊長として、この情報を読み、くるべきものがきたことを察知した。果たせるかな、八月九日ソ連参戦、一気に満州を席卷した。そして八月十五日終戦の詔勅が下った。ポツダム少尉に任ぜられて復員、直ちにふる里満州へ帰るべく下関に向かったが、満州・朝鮮への渡航は許されず、やむなく駐屯地へ引き返した。新聞に「満州国官吏は、満州国大使館に出頭せられたし」との広告が掲載されたので、さっそく東京へ向かった。

大使館で旧知の事務官と会い、その夜、満州国官吏数人の方々と満州情勢について語り合う機会を得た。その折に、満州引揚者の援護団体を作り、満州方面からの引揚者の援護対策と取り組むこととなったので協力してもらえないか、との誘いをうけた。意義ある事業と感じ、さっそくこれに応じて、福岡市下小山町に事務所を開設して間もない「大陸引揚者援護会」に赴き、引揚者援護活動に参画することになった。

大陸引揚者援護会

この「大陸引揚者援護会」設立の経過は、関東軍の指示により、関東軍第二課浜田中佐、満州国総務庁岩崎健治参事官、日本大使館日笠書記官の三人が、満州の情勢報告を日本政府首脳および陸軍省に行うため、八月十四日新京をたち日本に向かったが、途中、終戦の混乱に巻き込まれ、九月早々、ようやく日本の土を踏み、政府首脳および陸軍省に報告を行った折に、陸軍省の内示によって、浜田中佐と岩崎参事官の両人が、急遽開設した満州引揚者のための私設機関であった。

この機関は、当初、陸軍省が二百五十万円の活動資金を拠出するという構想の中で発足し、福岡市に所在の満州電信電話株式会社事務所に本拠を置いて、引揚者援護事業として取り組むことになったのであるが、情勢の変化によって、資金は外務省筋が負担することとなり、最終的には、外務省外郭団体として設置された在外同胞援護会（理事長松田令輔）が資金援助をする形をとることとなった。昭和二十年に資金が交付され、それとともに「大陸引揚者援護会」は、在外同胞援護

会の業務も併せて取り扱うこととなったのである。

博多港で大陸情報収集

終戦間もない博多港には、連日引揚船・復員船が入港して騒然たるものであった。私は、大陸関係情報を取材するため、博多港に毎日詰めて引揚者のお世話をしつつ、引揚者や密航帰国者からの情報をキャッチして整理し、「大陸情報」というレポートにまとめて、外務省、厚生省、県その他関係官公署、新聞社などの報道機関へ報告した。

博多港でキャッチした満州の情勢は、他の海外地区の日本人居住者の消息と比べて、甚だ悲惨なものであった。また、再三にわたり、密航帰国者の手に託して、在満日本人救済依頼の切々たる書簡も届けられた。

満州への密使派遣計画具体化

在満同胞困窮の情勢が、日を追って明らかになるに従い、引揚援護関係団体としては、政府に対し、生命の危険にさらされ、物を失い、飢餓と病苦にあえぎ、誤った日本国内情報の流布に戸惑う在満同胞に対する早急な救護対策の実施方につき意見具申を行い、もし、

救護の活動が困難な場合は、せめて文書伝達による日本国内情勢の広報連絡の実現につき交渉を行った。

しかし、敗戦間もない政府は、日々、海外からの引揚げや、復員で帰国するおびただしい人々に対する手だてだけで精一杯であった。また、占領軍の強力な統制下にあつて意を尽くすことを得ず、さらに、ソ連軍制圧下の満州ということもあつて、在満の人々に対する救護対策を行動に移すことは、甚だ困難な情勢であつた。

一方、厳冬期を迎える満州同胞への不安は日毎に深刻化した。満州ゆかりの人々にとって、許されない時期にきていると判断された。結論として、政府、あるいは公的援護団体の手に頼ることなく、民間・私的な機関独自で、ひそかに対策をたてるよりほかないと判断された。

密使となつて満州へ向かう

「大陸引揚者援護会」において論議の結果、占領軍に知られないように極秘で「密使」を編成し、密航渡満して、日本の正しい情報を伝達することを計画する

こととなった。宮崎健治氏が資金七十万円独自に調達し、ひそかに密航連絡班編成が進行した。この時、満鉄（南満州鉄道株式会社）側から参加要請があり、「大陸引揚者援護会」から二人、満鉄側から二人、計四人をもって編成することとなった。それぞれ担当地区を分担し、大連は、満鉄副参事横瀬多喜氏（大連一中卒）、奉天は、復員後援護会で引揚者の世話と取り組んできた満州建国大学卒業の白石修氏、長春は、満鉄参事平井弘氏（哈爾濱学院卒）、哈爾濱は私が担当することとなった。

いずれも、満州育ちの人々で、皆、満州へ行くのではなく、帰る人々であった。

小舟で大海を越え満州へ

いわし漁をする手練船という小型漁船を援護会がチャーターし、重油は西部軍の残務整理部隊が都合してくれた。船長は、北満州の大河、松花江の航行船の船長を永年勤めた人で、大連でこの漁船を手に入れて、密航して帰ってきたばかりであった。かなり年配の方であったが、家族を大連に残しているということで、もう一

度密航することに同意したのであった。

「大陸引揚者援護会」からのメッセージを小片に書いてシャツに縫い付けたり、日本円を小さくたたんで靴の中に隠したり、遺言も書き残して渡航準備をした。昭和二十一年一月七日、ヒューヒューと北風が鳴る厳冬の唐津港、密出国であったが、地元の警察署長さんも見送ってくれた。ともづなを解いて船は出航した。強風の中荒波に揉まれながら第一日目は長崎県大島に寄港し、水を積み、各部点検を行って、航行最後の調整が行われた。我々一行は、日本との別れ、あるいはこの世との別れともなるかもしれない母国での最後の一夜を、島の人が振る舞ってくれた雑煮を静かに味わって、民家の一室でまどろんだ。

翌朝、焼玉エンジンの音も高らかに大島をたった。進路を西にとり、東支那海に入り、北上して済州島沖を経て、黄海に入るまでの冬のは荒れに荒れた。山のような波濤は、小舟を木片の如くもてあそんだ。波の山を船が登って行くときは、天空に向かって飛んでいるのではないかと思うほどで、登りつめると船底が

海面を叩く激しい音がする。今度は海底にそのまま突き当たるのではないかと不安になるほど下降するのであった。乗船した者は、船には自信のある人たちであったが、食事は全くのどを通らなかつた。時折、リュックサックの中からみかんを取り出して、のどを潤し、体力消耗の極限を補足したに過ぎない。船底に、頭と足を交互にして横になり、左右の他人の足を抱きかかえて、ローリング、ピッチングによる大揺れに対し、転がるのを懸命に防ぐのであった。

唐津港を出航して五日目、山東半島の山々の白雪が遙かに望めるころから、黄海は波静かとなり、渤海湾に入ってからには鏡のような肌で、滑るが如き航海となった。

六日目の朝、三山島が茜の中に影を浮かべた。上陸準備をした。払暁の淡い電灯の光がまたたいて、まだ静かに眠る早朝の大連の街を眼前にして使命感、危機感が交錯し、悲壮感が極度に高まった。緊張のひとつとまである。一文字防波堤に添って静かに薄氷の露西亞町埠頭に入り、停泊中のジャンクの中に割って入る。

「アイヤ リーベンレン ライラ（おや、日本人がきたぞ）」と中国人の船頭が頓狂な声を出す。平静を装い、小舟を呼んで上陸した。

ソ連兵がマンドリン銃を構えて監視している。日本人だとは気付いていない。「ドープロエ ウートロ（お早う）」と声をかけて、若い兵士のそばを通り抜ける。この辺りは、私の子供のときの魚釣り場で、私にとってはなじみの土地であり、道筋には明るい。通勤ラッシュの労働者の流れの中に吸い込まれて市井の人となった。

市内電車に乗り、早苗町の我が家に帰り着くと、母と姉は驚愕、父は特務機関に勤務していたため、ソ連兵に連行され、消息は不明という。密告者も多く、滞在は危険であるというので、さっそく移動の準備にかかった。密使として同行の平井先輩と満鉄本社で会い、北上の打合せをした。満鉄鉄道部参事の平井先輩の手配で万事順調に運び、旧満鉄職員ということにしていた。鉄道パスを発給してもらい、作業員の腕章もいただいた。

動乱の満州、北帰行

翌日夕刻、大連駅から哈爾濱行きの列車に乗り込んだ。車中は満員で、通路もデッキも乗客でひしめいていた。ギョウギョウ詰めの車中を、ソ連兵ダワイ（強奪行為）が何度も行き来して金品を強要し、応ぜぬ者には小銃の台尻を容赦なく振る舞った。私は、同席の中国人たちと抱き合って寝たふりをして難をさけた。客車の窓は、ほとんどガラスはなく、板張りになっていて、真ん中に小さな穴があいていた。この穴が男子専用の小便穴で、用便のときは、窓ぎわの人が後ろから押して、抜け出してこないように協力するのである。不安な夜が明けて、長春駅に着いた。数人乗っていた日本人が皆下車した。瓶詰の涼水と饅頭を買って、近くに同席している中国人たちに振る舞った。傍若無人のソ連兵は下車して、我が同穴の友の間には笑い声もきかれた。長い停車時間の間に、多数のソ連兵が乗り込んできて、車中は再び騒然となった。私の隣席に二人の若いソ連兵が座り、旅の道連れとなった。ソ連兵たちは、日本軍残党掃討の話をしてしたが、話がこ

うじて、車中に日本人がいないか、捜し出せ、ということになり、隣のソ連兵と話をしていた私が、日本人探しの通訳をさせられることになったのはまったく閉口した。ソ連兵の指示で、ちょっと風貌の変わった者がいると、お前は日本人でないかと聞いて歩かされたのである。中国人はだれも、おまえこそ日本人ではないか、と言う人はいなかった。私の中国語で、中国人が、私を中国人だと思うはずはない。黙ってかばってくれたのである。「謝々！ 中国人」私は心の中で手を合わせたのであった。

哈爾濱潜入、情報伝達工作開始

哈爾濱駅に着いたのは夜七時ごろであった。「ドスビダーニャ（さようなら）」、プラットホームでソ連兵と握手して別れ、駅の改札口で日本人と気付かれずに駅を出たときは、胸を締めつけていた鉄鎖が、ブツツと音をたてて切れたような安堵感であった。

久しぶりに北国の澄みきった厳しい冷気を吸い込みながら、戒厳令下、厳寒の哈爾濱の夜の街を妻の実家に向かった。私が応召のあと、妻は哈爾濱の実家に身

を寄せているはずであった。零下三十余度、白雪に覆われた駅前の大通りを馬車に集団で乗り込んだ中国人たちが、ソ連兵の制止もきかず、馬に鞭打って、一目散、蜘蛛の子を散らすように、各方面に走り去って行くのであった。「ストイ（止まれ）!」、ソ連兵の甲高い誰何の聲が、透明な寒気の中を突き破って闇の中に消える。殺気が鋭く胸を刺した。

妻の実家のある工廠街のビルの大門は堅く閉ざされて、入るすべはなかった。幸い階下に住んでいた朝鮮人の厚意で中庭に入れてもらい、幸運にも、この夜、中庭側の門の当番であった義姉と連絡がとれて、妻と実家の家族の住む家に入り込むことができた。一月十七日の夜のことである。

家族との話し合いの中で、この地で昨年八月九日、ソ連軍侵入以後に起こった数々の事件が、私が博多港で密航帰国者たちからキャッチした情報とほとんど合致していた。我ながら、風の便りの正確さに驚かされたのである。

しばらく家庭に潜み、徐々に情報伝達の輪を広げた。

まず日本人会長に会って日本からのメッセージを伝達した。会長の要請で、国民党幹部将校とも会って、日本の国内事情に対する質問に答えたりした。国民党の人々は、日本に投下された原子爆弾について強い関心を示した。

また、学友や、親しい知人と密かに連絡を取り、請われるまま市内各地の地域や、職域グループと極秘に会合をもって、日本国内事情の伝達を行った。

二月十七日のことであったと思う。興安北省総務科長瀧川惇氏が来宅した。斉斉哈爾から、在斉難民南下促進工作の要務を帯びて、南滿州へ向かう途中に立ち寄ったのであった。前年十二月第一回の南下促進工作の折、この家に立ち寄り世話をかけたので、お礼に立ち寄ったということであった。

この日、瀧川氏が哈爾浜駅について地段街の露天で食事をした折、哈爾浜学院を卒業した者が、日本から連絡に来たらしい、という噂を耳にしたが、それが君であろうとは、ということでお互いに奇遇を喜びあった。

この時点では、私はまだ潜行していて、ごく一部の
人とはか会っていなかったのであるが、市内の難民が
街頭で開いている露天の一膳めし屋にまで、情報が流
れていたことに一驚すると共に、祖国日本の真の動静
が閉ざされた動乱の満州において、いかに渴望された
情報であったかを知らされたのである。

その後、哈爾浜駅に勤務していた同窓生などの協力
により、斉齊哈爾の難民グループ、北安の同窓生とも
連絡をとることができた。

また、三月ごろから、わが寓居に満州日報哈爾浜代
表山崎伝君が同居した関係で、哈爾浜駐在の各日本新
聞記者たちの会合が、頻繁にこの家で持たれたことも
あって、私のもたらした日本内地の情報は急速に多方
面に拡散していった。

哈爾浜住民と奥地難民

ソ連軍進入、日本軍撤退、哈爾浜在住日本人は一日
にして力を失い、生命の危機にさらされ、ソ連軍の命
ずるまま、虚脱状態となった。治安力の空白は暴動・
略奪を生んだ。さらに、治安の乱れの中、ソ連兵によ

る暴行略奪も頻発し、このソ連兵の「ダワイ」に恐れ
おののいた。

応召のため、国際運輸倉庫に預けてあった私の私
財も、最初の暴動によりすべて略奪されてしまってい
た。哈爾浜在住者の被害は大きかったが、永年哈爾浜
市内に住んでいた日本人は、かなりの私財を持ったま
まであったので、売り食いもできたし、住むところも
友人間で都合がついた。不安の中、何とかやりくりの
生活を続けつつ母国への引揚げに希望をつないだので
ある。

しかし、奥地開拓地などから哈爾浜に避難してくる
人々は、まさに難民であった。親族を失い、傷つき、
疲れ、衰弱し、物は奪われ、精神的なダメージに打ち
のめされ、見る影もない誠に気の毒な姿であった。さ
らに、衰えきった体に発疹チフスが追い打ちをかけた。
花園国民学校が難民収容所になっていたが、ここで毎
日、おびただしい人が死んでいった。悲惨の限りであっ
た。

八路軍入城す

一方、中国内線が拡大し、八路軍が国民党軍を随所に撃破して北上し哈爾濱に迫った。哈爾濱所在の国民党軍は飛行機で逃避し、ソ連軍は撤退した。八路軍の哈爾濱入城は肅々と行われた。装備・服装の貧弱な八路軍兵士が、手榴弾を手に、ごく静かに徒歩で市街へ進入し、武力抗争も暴行沙汰もなく、一日にして無言のうちに制圧してしまったのであった。私どもは八路軍の軍紀厳正を目の前で確認し、ひとまず、安堵感を持つことができたのであった。

そりをひいて露店古本屋開業

二カ月ほど、情報伝達活動を行った。逐次、友人たちとの連絡も取れ、同窓後輩の吉岡久四郎君と巖守剛君が訪ねてきた。この二人は哈爾濱学院卒業後、哈爾濱市公署で席を並べた間柄である。巖君は中国人である。ソ連軍進入により、前職の関係で危険を感じると、道外傅家甸中国人街の巖君の家に潜み、情勢が治まると馬家溝の吉岡君の白系ロシア人の家の下宿で二人暮らしをする仲であった。よもやま話で数日を過ごした

あと、哈爾濱学院図書室にあった書籍を、学院の雑役をしていた中国人が、防空壕から掘り出して売っているという話もたらされた。学院所蔵の書籍は、北滿鐵路をソ連から滿州国が接収した折、北滿鐵路所蔵の図書数万冊をもらいうけたもので、ロシア関係原書をこれほど多く所蔵しているところはほかになく、貴重な文庫であった。

吉岡君と、この本を買って売ろうじゃないか、ということになり、なけなしの金をはたいて買えるだけ買った。吉岡君が仕入れを担当、手製のそりに本を積んで馬家溝から道裡の我が寓居まで運んできた。数日ばかりで数百冊の書籍が持ち込まれた。長い間、土中に埋もれていたため、湿気が表装を崩し、土砂も付着していて、そのままでは商品にならなかつた。一冊一冊といねいに拭いて手入れをした。学生時代不勉強だった私は、このときはじめて、母校に素晴らしい書籍があったことを知らされたのであった。

古書をそりに積み、雪解けの石畳を毎日二人でそりをひいて、寒空の街角に立った。手に取る人は多かつ

たが、買ってゆく人は少なかった。動乱の後、インテリ層にはお金がない時期なのであった。我々の商売は見通し暗く、結局、八路軍官学校にごく安価で一括引き取ってもらい、しばしの古本屋は幕を閉じた。せめて、由緒ある資料を保存してくれるところに収めることができたことが、なぐさめとなったのであった。

難民の職業あっせんに奔走

請われて、日本人会に籍を置いて、奥地から哈爾濱に入ってくる人々への職業あっせんと、中国人・ロシア人の企業計画に対する技術相談、ならびに企業体への日本人技術者派遣などを担当した。

技術相談の部門には、京大出の大学教授だった先生と、東大出の応用化学者がいて、中国人の企業家からの、工場設置や製造方法などの相談に忙殺されていた。私は、この方面については通訳的なお手伝いをして、主として奥地からの難民をロシア人家庭の家事手伝いなどにあっせんすることに奔走した。

「日僑遣送」などと、中国側も公に引揚げの報道をするようになったころであった。ユダヤ人商人のどこ

ろに日本人女性を紹介に行った折、「私どもは近く日本に帰らねばならない」と言ったところ、ユダヤ人は、「君たちは幸せだ、帰る国がある。私には帰る国がないんだよ」と言った。そして彼は、机の上に日本の商社の株券を広げて、「日本という国が破れても、これは後日役に立つのだ」と申し添えた。私はそのころ、株式などということは全く念頭になかったから、そんなことがあるのかなと、漠然と考えただけであったが、国際的経済感覚を持つ彼らの目のつけどころは一味違ふと、帰国してしばらくしてから感心したのであった。

国破れて山河あり

八月に入ると引揚げ開始が近づいて、身辺の整理が始まった。携行できるもの以外、すべて処分してしまわねばならない。しかし、引揚げの明確な日取りは不明なので、売り食いのため、どの程度の物を売らずにおくべきかなど、家族で相談しては処分していくのであった。

妻の実家には、戦前から「ボロ買い」（不用品買い取り）の中国人が出入りしていた。戦後の治安の悪い

ときには買ひ物の注文取りもしてくれた。彼は、通貨の変動にも敏感であった。彼が金勘定をしながら言うのに、「今のところ、最も高いのは金票（日本円）で、次が国幣（満州国元）、国幣の中でも日本国印刷の紙幣が高値で、満州国印刷のものは安く、八路軍の軍票がその次で、ソ連軍の軍票は価値がない」と言うのであった。

敗戦国日本の貨幣が一番高値で流通していることは、私にとって不思議なことであったが、権力興亡を幾度も経験してきた漢民族の歴史観というものであるうか、日本の敗戦も、彼らにとっては悠久の流れの中の一事件に過ぎないのかもしれない。

このポロ買いさんは、九月になって、私どもが引き揚げる当日、最後の処分品を引き取りにきた。その折、餓別に月餅をもってきてくれた。空になった家の中に人情の温かみが残った。爽やかな離別であった。

引揚げ開始、さらばふる里満州よ

九月になり、いよいよ「日僑遣送」が始まり、順番がきて、私どもの梯団は哈爾濱駅に集結した。身元調

べに続き、所持品検査が微に入り細にわたって行われ、不快な時間が長々と続いた。哈爾濱経済界の重鎮だった人が拉致され、処刑されるらしいという情報が聞こえてきていやな圧力を感じつつ乗車の順番を待った。

ようやく、義母、義姉、妻と私、一家揃って乗車した。有蓋の貨車である。第一の検問を通過して何となく気楽になり、リュックサックにもたれて出発を待った。

何の知らせもなく、ゴトンゴトンと引揚列車は発車した。さらば哈爾濱、哀愁と安心感が胸に迫った。暗い貨車の中、皆、黙って語らなかつた。翌日、第二松花江で下車させられ、徒歩でかなりの距離を鉄道の軌道の上を歩かされた。それぞれ、大きなリュックサックに、詰められるだけの世帯道具を詰め込んでいるので大変難渋した。

松花江を渡ると、国民党軍支配下に入る。再び、列車で長春に到着、ここで数日を過ごし、壺盧島へ向かうこととなった。今度は無蓋のフラットという貨車で、秋深い満州の風は冷たく、時折の水雨が疲れ果てた引揚げの人々に容赦なく降り注いだ。何日も、この平ら

な屋根のない貨車積みであった。車上で息を引き取る老人や、幼い子供も少なくなかった。停車のわずかの間に、線路の横に寝かせて手を合わせ、発車とともに永久のお別れであった。

壱蘆島で順番待ちの数日を過ごした。いよいよ引揚げの日、港に整列した。迎えの引揚船LSTの船上に掲げられた日の丸の旗は輝いて見えた。タラップを渡って船上の人となったとき、密航潜行九カ月間の危機感が一挙に去った。このとき日本の国力の中に抱擁されている我が身を強く感じたのであった。

祖国、日本

結局、祖国は日本であった。密使として渡満したほかの三人も、それぞれ無事に帰国した。私どもの日本情勢伝達のための日本から満州への逆密航は、在満同胞の心の支えとなり、祖国日本への引揚げに希望をつなぐための一片の糧となりえたように思う。また、私ども密使の役目を務めた四人の冒険的潜行が、めまぐるしく変転する戦後の満州の中で、一人の犠牲者もたすことなく、目的を果たして、無事帰還しえたことは、

ひとえに満州在住同胞救済のための、多くの人々の祈りのおかげであったと思うのである。

私の歩んだ道

岩手県 折居 ミツ

平成七年九月、戦後五十年にあたり『大陸の花嫁』という本を見まして、もう一度五十年前を振り返ってみました。

大陸の花嫁は、多くの人は写真だけで、なかには挙式の日まで相手の顔も知らないまま結婚を決めた人もいました。彼女たちは、「大陸の花嫁」「土の花嫁」「拓土の花嫁」などともてはやされましたが、実際は「国策の花嫁」というべきものでした。昭和の初期、大陸の花嫁たちが登場した期間はおよそ十年間で、その間どれほどの女性が大陸の花嫁として満州に渡ったのか、残念ながらその数字は残されておりません。